

乳幼児（0～6歳）の足部の成長

聖徳大短大 大塚美智子

日女大家政 ○奈良智子 千葉桂子

（目的）乳幼児期は歩行開始時期に相当するため、足部の骨格成長、形態変化の著しい時期であり、アーチ形成も急速に進む。土踏まず形成の遅れ、外反母趾などの足部障害が出現してくるのもこの時期である。しかし、乳幼児期における足部の成長に関する研究は極めて少なく、詳細な成長量、成長カーブ、足型の類型化についての検討はほとんど行われていない。そのため、乳幼児期には適合度の高い靴を得難いのが現状である。そこで、乳幼児期の足部の縦断的データを用い、成長の変異について検討した。

（方法）資料は、首都圏在住の保育園児（0～6歳）延べ449名、計測は、1989～1992年の夏季（7月～9月）に計4回行った。計測項目は、足長、足幅、足高、足囲ボール、足囲ウエスト、甲囲、足指付け根厚、甲厚、内果高、外果高、足首囲、身長、体重、大転子高、膝関節高の15項目である。測定と同時に足型輪郭形状を採取し、第2指骨頭点、左右ボールジョイント、踵点を結んで得られる角度、長径12項目を測定した。

（結果）1. 足長の成長カーブは、2つのピークをもつうねりを描く。2. 足部の長径、高径項目は、体幹部の高径項目と、周径項目は体重と高い相関を示し、月齢との相関は低い。3. 内果高の成長は歩行開始直後の生後2歳以降スパートし、アーチ形成が進む。4. 足囲ボールが足囲ウエストより大になるのは生後2歳半以降で、土踏まずの形成はアーチの形成開始時期より6か月遅れる。5. 月齢33か月以上のサンプルの25%に土踏まず形成の遅れが認められるが、このうち先天性の扁平足と考えられるサンプルは3%以内であり、足裏の運動不足が原因であると考えられる。